

Japanese Written Task 2 「文学批判」

《ラショナルレ》

パート4では、夏目漱石の「こころ」、芥川龍之介の短編集、夏目漱石の『こころ』を読み[1]、「文学と社会」[2]という立場から作品の分析・考察を行った。この内、芥川の短編、「羅生門」で、作者が読者に問いかけた「正義とは？」に付いて興味を抱き、これを伝えるための表現技法や文章構成などについて考えてみた。

この作品は、「羅生門」の時代背景を現代に変えた短編小説である。同じテーマやモチーフを保ちながら背景を変えることで、作品の主題である「生存のための人間の利己的行動は、その道徳性を、明確に評価できない」という概念は、どの時代・背景でも通用する、普遍的なものであることを、読者[3]に伝えることを目的とした。また、人物名をあえて代名詞にして、主人公「男」という設定にした。芥川特有の三人称視点の描写、作者の介入、そして具体的で簡略な描写を真似し、主題を単純に伝えるのではなく、読者自身に考えるようにした。

羅生門の、暗さと静けさを描写する表現、そして火明かりだけの情景描写が、出来事をより生々しく読者に印象付け、感情移入をしやすくしていることに注目した。この物語では、同じように、暗や静を意識して、暗い駅の中に差し込む様々な光の描写を使い、主人公の心情変化を助ける効果を得ようとした。

《本文》

男はひとけのない歩道を当てもなく歩いている。都心から少し離れたここは、高度経済成長期に建設されたニュータウンであったが、人口激減のため、今はゴーストタウン感のある町である。太陽は真上から彼を照らし、夏の暑さに耐えられず、近くの地下鉄の入り口へ入っていった。

静かな駅には、男以外、誰もいない。その小さな構内を照らしているのは、階段から入ってくる陽の光と、点滅している蛍光灯の光、そして券売機や改札機の液晶画面だけであった。暑い外と比べ、駅内は恐ろしく寒く感じられた。その違和感に、男は鳥肌がたった。

駅の暗さに目がなれてくると、壁際や階段に、ホームレスが数人、床のコンクリートに寝転がっている姿が、男の目に映った。微動だにしない彼らの姿は、まるで死人のよう。外から差し込む、かすかに漏れてくる光が、彼等の体の一部だけを照らし、機械の冷たい光と対照した。

男は、まるで時間が止まっているような息苦しさを感じた。外から漏れる太陽光が埃に反射し、きらきら光っている。それだけが時間の流れを気づかせてくれているように思えた。

そこら辺に寝転がっている彼らの中には、元は、男のように正直な社会人だった人も、自慢の家長だった人も、あるいは大切な息子だったかもしれない。おそらく彼らのほとんどは、居場所を無くして、社会から追い出されたのであろう。世界から拒否され、希望を失った彼らは、まるで昆虫の抜け殻のように見えた。

男は「自分は彼らのような末路は辿らない。どうして真面目に生きてきた自分が、」と、彼らの姿と自分に、距離感を置いた。

その瞬間、男の立っている後ろから、誰かが走って階段を降りてくる足音がした。振り向くと、そこには一人の青年がいた。目を隠す程に長く、何日も洗っていないようなべたついた髪の毛をしていた。よれよれのシャツの上に、しみだらけのジャケットを着て、左手には安っぽいブリーフケースを握っている。大学を出たばかりなのだろうか、身なりからして就活に勤んでいるようにも見えるが、あまりにも清潔感がなさすぎる。

その不審な青年の姿を、男は目で追った。

青年は駆け足で改札口へ向かった。皆カードを使う今、券売機を素通りすることは不思議なことではない。ところが、青年の次の行動は男を驚かせた。

青年は、素早い動きで自動改札機の柱を片手で握り、その上を飛び越えようとした。

男は青年の腕を掴んだ。

「おい、君。」

その瞬間、一筋の太陽光が反射し、男の目を引いた。青年の腕には、彼の身なりからしても歳からしても分不相応な、高価そうな腕時計がはめられていた。多分、親から譲り受けたものとかなんだろうと、男は思った。その時計に釘付けになっている男を見て、青年はイラついた口調で言い出した。

「なんなんだよ。」

男はまた青年の顔に目を向けた。しかめた顔で、口を開いた。

「いくら急いでいるからといって、そんなことをしてはいけないだろう。見れば大学出たばかりのようだが。そんな心得では、どこにも就職できないぞ。」

青年は、男の目を直視しながら、言い返した。

「俺は今、バイトの面接に遅れそうなんだ。話している暇などないんだよ。」

男は戸惑った。彼は理解ができなかった。いつも正しい行動を取ることをプライドとして生きてきた彼には、青年の小さな過ちさえ許せなかった。

もちろん、そのような価値観が社会で認められるのかは、別問題である。

戸惑っていた男の姿を見て、青年はため息をつき、ムカついた口調で言った。

「おじさんが何を言おうとしているかはわかる。「もっと真面目に生きる」とかの一般論だろう。でもな、おじさん。そんな心がけじゃ、今の世の中では食っていけないぜ。俺はな、一生懸命勉強して、大学卒業しているけど、どこかのバイトですら就職できなかったんだよ。今日の面接が何週間ぶりなのかも覚えていない。今俺は家賃を払う金も、食物を買うお金も何も無い。勿論交通費もな。」

怒っているように始まった青年のその言葉は、だんだん、自暴自棄に聞こえる。

男のしかめた表情は、固まったままである。しかし、話を聞いているうちに、彼の心の中では、さっきのような、青年を戒めたときのような正義感は無くなっていった。その辛そうで、かすかに共感できる彼の話を聞いていると同時に、男の心に、とある勇気が生まれてきたのであった。

青年が黙ると、男は無言で、彼の腕に目を移した。

「そうだな。」

男が周りを見回すと、彼の目に入って来るのは、さっきのホームレスの姿だけであった。彼は一瞬、決意に満たされたような目で、つかんでいた青年の腕を強くねじった。

「だったら、これを持っていっても私を恨むな。私も今朝、会社から首にされてね。」

男はもう片方の手で、素早く青年の腕時計を外した。それをポケットにしまった彼は、足早に、外の暑さへと出て行ったのであった。